嶋満神社便り

平成二十七年八月号（第十六号）
発行　嶋満神社奉賛会

続、「八幡さん」ってどんな神様？

前号では当社の祭神、八幡さんはもともと渡来神であり、それが我が国で一番多い神社数を誇るようになったのは応神天皇との習合、東大寺大仏建立や弥勒信仰とのかかわり、源氏の氏神となったことなどが関係している、ということなどを島田裕巳氏著の本とともに見てきました。

ではなぜ遠く九州宇佐の地にあった外来の神である八幡神が東大寺の大仏建立に深くかかわることになったのでしょうか。

大仏鋳造の際に八幡神は「神である自分が天地の神を率いて必ず大仏建立を完成に導きたい、建立に使われる銅を（扱いやすい）水に変え、作業に使われる草木や土に自分の体を混ぜ込んであらゆる障害を取り除こう」と託宣（お告げ）を下したとされます。これはすなわち何を意味するか・・・。

未曽有の規模の銅製の大仏鋳造は、渡来人である秦氏の鋳造技術者の力なくしては到底なしえない大事業でした。八幡神とその氏子集団一族はその最新の技術力を以って中央に進出して行ったのです。

宇佐神宮には鍛冶翁の伝承とともに御鍛冶場といわれる霊泉（御霊水）が祀られています。

余談ですが舞鶴の大森神社も金属加工（古代製鉄）の技術者集団の氏神であり（高橋卓郎氏）、境内の泉もその技術に不可欠のものだったと言えるでしょう。

（宇佐神宮御霊水）

シャーマニズム・ゾロアスター教との関係

大仏鋳造直後の仏事の法要に八幡大神は神に仕える女性禰宜とともに、天皇と同じ紫の輿に乗って東大寺の門をくぐりました。これが神霊を乗せる神輿の始まりとされています。（宇佐八幡宮HP）つまり巫女・・・八幡神の託宣を伝える女性（いわゆるシャーマン）が重要な役割を担っていたことから、八幡神の誕生には当時シベリアから朝鮮半島に広まっていた「シャーマニズム」の影響が考えられます。

さらに前号で見た「密教の八流の幡との習合」という観点では斉明天皇の代（七世紀半ば）に入ってきたといわれるゾロアスター教の影響もうかがえます。（古田史学会報五十六）

宇佐八幡には現在の地に鎮座するまでに何度も遷座を繰り返し、ある時代にはその心が荒れて人間を何人も殺したとの伝承があります。八幡神を祀る渡来人と土着の人間との争いが見て取れます。

応神天皇（譽田別尊・・・ほんだわけのみこと）とは

では歴史上実在したことが確かなもっとも古い天皇と言われる応神天皇とは一体どのような存在だったのでしょう？

彼は、『古事記』にはツヌガのイササワケの神（気比の大神）と名を交換して、ホムタワケという名になったとあり、ホムタ（鞆）は奈良朝以前はハダと発音していることから「秦氏」につながることが推測されます。（古田史学会報五十六）

また「ホムタ」→「ホムチ」→「コンチ」と韓国語の「昆支」（コムキ・・・百済の王）につながるとの説もあります。（石渡信一郎氏）

「ワケ」とは元来皇族の子孫で天皇になれなかった地方領主の称号であり、応神は、それが中央に入って天皇になったことを意味しています。

その応神天皇が外来の八幡神と習合される過程にはそれほど無理はなかったのでしょう。

この様に見て来ると八幡さんの「おどろおどろしい」面ばかりが浮かび上がるようですが、それは遠い古代史上のこと。その後の人間の歴史の中で八幡さんには人々の様々な思いが込められていき、信仰の形も変化する中で、今のようなありがたい神様となって行ったのは前号の通りです。

さて、八幡さんのお話、まだまだ続く！